

2001年12月2日

いと小さき者の中から

加藤 享

[聖書] ミカ書 5章 1~4節 a

5:1 エフラタのベツレヘムよ／お前はユダの氏族の中でいと小さき者。お前の中から、わたしのために／イスラエルを治める者が出る。彼の出生は古く、永遠の昔にさかのぼる。 5:2 まことに、主は彼らを捨ておかれる／産婦が子を産むときまで。そのとき、彼の兄弟の残りの者は／イスラエルの子らのもとに帰って来る。 5:3 彼は立って、群れを養う／主の力、神である主の御名の威厳をもって。彼らは安らかに住まう。 今や、彼は大いなる者となり／その力が地の果てに及ぶからだ。 5:4 彼こそ、まさしく平和である。

[序] 報告

去る19日の朝東京に向けて発ち、昨晚無事に帰って来ました。お祈りを有難うございました。第一の目的は28日の剣道八段の試験を受けることでした。これはまだまだ修行が足りず歯が立ちませんでした。そのためにいろいろな道場で稽古をさせていただき、大変励みになりました。また25日埼玉県の上尾教会で礼拝の奉仕をした後でシンガポール会をさせていただきました。連休と重なり、また会場もかたよっていたので西本夫妻、朝長さん・なつみさん、鈴木かをりさん・いずみさん、森さん一家6人、鈴木弘美さん、藤村さん、岸さんの15名しか集まれませんでしたが、でも久しぶりに集まって近況を聞き合い、祈りあうことが出来ました。皆さんが宜しくとおっしゃっていました。

30日は成田空港近くの富里教会で集会を開いてくださり、奉仕させていただきました。山浦英美さんが出席しました。そのほか柳沢さんを毎日病院にお見舞いして手をおいてお祈りさせていただきました。神さまが必ず祈りに答えてくださると信じます。これからも祈り続けて参りましょう。また19日成田に到着した夜は近くの金子さんのお宅に泊まり旧交を温めました。25日に都合が悪くて出席できなかった土田さん夫妻ともお目にかかりました。

さてクランツのローソクの一本目に火がともりました。クリスマスを待ち望む待降節の始まりです。4本のローソク全部が灯りますとクリスマスです。そこで今日のメッセージからクリスマス・ストーリーの序曲をお届けします。

[1] 最も小さい町から

クリスマスは救い主イエス・キリストの誕生をお祝いする時です。イエス・キリストは今から約2000年前に、ユダヤのベツレヘムでお生まれになりました。その時救い主を最初に礼拝したのは、夜野原で羊の番をしていた貧しい羊飼いたちでした。次に東の国からはるばるやってきた占星術の学者たちが、高価な贈り物を捧げて礼拝しました。

東の国からはるばるやって来た学者たちは星の専門家です。彼らは夜空に異常に輝く星を見つけました。これは二つの惑星が重なって一つに見える「相合」という794年に一度起こる珍しい現象ではなかったかと言われています。その時は魚座の木星と土星の相合が、5月・10月・12月に起こったそうです。占星術では魚座は新しい時代の始まり。木星は世界の支配者。土星はユダヤを示すそうです。そこで学者たちは「ユダヤに世界の支配者になる王が誕生し、新しい時代が始まった」と判断したようです。

彼らは王の誕生なので、ユダヤの国のヘロデ王の宮殿を訪れましたが、そこでは新しい王は誕生していません。ヘロデは不安を抱きました。彼はユダヤ人ではありませんが、世界に新しい時代をもたらす王というのだから、普通の王ではない。これはユダヤ人が待ち望んで来た救世主メシアのことではないかと思いました。そこでユダヤ教の指導者たちに尋ねました。「メシアはどこに生まれることになっているのか。」彼らはミカの預言書から「ベツレヘムでしょう」と答えました。この預言も前回のイザヤの言葉と同様に、700年以上も前のものです。

「エフラタのベツレヘムよ お前はユダの氏族の中でいと小さき者。

お前の中から、わたしのために イスラエルを治める者が出る。

彼の出生は古く、永遠の昔にさかのぼる。」

「今や、彼は大いなる者となり その力が地の果てにまで及ぶからだ。

彼こそ、まさしく平和である。」

「彼こそ平和と呼ばれて世界中を治める偉大な支配者が、ユダの一番小さな町ベツレヘムから出る。これは神さまがお決めになったことである」という預言です。神さまから送られてくる世界を平和をもって治めるお方——これはメシアしかいません。メシアはベツレヘムから出る。どうしてベツレヘムからなのでしょうか。ベツレヘムが一番小さな町だからだというのです。

ここでサウルがイスラエルの最初の王に選ばれた時のことが思い出されます。8月の説教で学びました。当時のイスラエルではくじ引きが神さまの意志を表わすとされていました。全部族の会合の席上で、くじはサウルに当たりました。ところが彼は荷物の間に隠れてなかなか出てきませんでした。自分は最も小さい部族の中の最小の一族の出身だから、王として大部族どもを従えることなど出来ないと思ったのです。しかし神さまは国中で一番小さい家の者だからこそ、王に選んだのでした。

更に歴史を遡れば、イスラエルの民がどうして神の民に選ばれたのでしょうか。これも他のどの民よりも貧弱だったからでした。使命を果たしていくためには、それに相応しい人が選ばれなければなりません。一番貧弱な民が一番小さな家から出た王によって栄えていけば、これは神さまの恵みにほかならないと誰もが認めます。そこで神さまは貧弱な神の民の王として、

国の中で一番小さな家からサウルをお選びになったのです。

世界に新しい時代をもたらす救い主は、「彼こそまさしく平和である」と言われるお方です。だからこのお方もまた、ローマ帝国の中の小さな植民地の一番小さな町ベツレヘムから出るようにと神さまはお決めになったのです。

[2] ケリムの役割

さて皆さん、どういう社会が私たちにとって良い社会なのでしょう。それについてジャン・バニエの言葉をご紹介します。彼は、世界各地に知的障害者の共同体「ラルシュ」(箱舟)を100ヶ所以上も作った、優れた思想家です。私の友人もフランスのパリの近郊のラルシュで、もう30年働いています。彼女はピエルフォンの名誉町民になり、墓地も提供されています。私たちの長男も学生時代に8ヶ月奉仕に行き、お世話になりました。

西アフリカにあるラルシュの一つに、ケリムという少年がいました。孤児で、3才の時脳膜炎にかかり重度の障害児になりました。孤児院で誰からも相手にされなかったので、話をすることも歩くことも出来ず、自分の頭を叩く自傷行為をするようになりました。それがラルシュに移って12年ほど暮らすうちに、少し歩くことと、ロバに餌をやる事が出来るようになりました。そしてリーダーがケリムの不思議な感性を発見しました。スタッフの間にわだかまりや争いが生じると、ケリムが自分の頭を叩き始めるのです。リーダーたちはケリムの警告を感謝するようになりました。

バニエはケリムを例に取り上げて、こう言っています。「健常者と言われる人々は、共に生活することが実に難しい人たちだと思います。競争社会に生きているために、仲良く暮らすことが困難なのです。仲良く暮らすよりも、派閥を作って争います。仲間を増やそうとし、武器を手に入れて防衛体制を整えたりもします。遂には戦争を惹き起こします。そんな中でケリムたちが私たちにこう語りかけています。“皆さん、なぜ互いに愛し合わないのですか。争いを止めることが出来ないのですか。仲良く暮らせないのですか。” この叫びは、神が叫んでいる叫びと同じだと思います。」

ある人は反論します。「でもケリムのような人たちだけでは生きていけない。彼らは健常者の保護があって、はじめて生きていけるのだ。健常者たちがこの競争社会で懸命に稼いで寄付をするから、彼らは生きていけるのだ。」 そうです。ラルシュは健常者の寄付と奉仕で支えられています。寄付と奉仕が止まったら、弱い人たちはたちどころに生きていけなくなるようになります。では社会の役に立たないお荷物は、いない方がよいのでしょうか。

この世界では、大きいこと、強いこと、優れていることが大事にされます。小さいこと、弱いこと、

貧しいことは卑しめられて、尊ばれません。邪魔者扱いされています。小さいこと、弱いこと、貧しいことには価値も意義も無いのでしょうか。全ての生き物は一定の比率で障害児がうまれてくるように定まっているそうです。人間の場合は大体1000人に3人位の割合で障害児が生まれてくるのが自然の摂理だそうです。神さまは人間の命をどうしてそのようなものとしてお造りになったのでしょうか。

パウロは人間の体に「お前はいらぬ」と言える部分など一つもない。ほかよりも弱く見える部分がかえって必要なのだ。では弱く、見劣りすると思われる部分の役割は何か。「各部分が互いに配慮し合って、体に分裂が起こらなくする役割だ」と言っています。(コリント一 12:25)、としますと、皆が互いに思いやり、優しくいたわり合う心を作り出して、社会を一つにしていくようにと、神さまは1000人に3人位の割合で障害を持った人をお造りになっていると考えることができるのではないのでしょうか。

「健常者といわれる人々は、すぐに競争社会を作り、仲良く暮らすことを難しくする。」とバニエは言っています。健常者だけでは仲良く暮らすよい社会は作れないのです。小さな者、弱い者が居て、はじめてよい社会が生まれていくのです。パウロは「ほかよりも弱く見える部分がかえって必要なのだ」と言いました。「弱い部分」とは言っていません。心ない人には、弱くてダメな部分だと見えるだろうが、実はなくてはならない大切な部分なのだと言っているのです。この大切な真理を今日は心にしっかりと受けとめたいと思います。

[結] 謙遜を身に付けるために

大きな者、強い者、優れた者は知らずしらずの間に、自分の考えややり方を人に押し付けたり、押し通そうとしがちです。それが小さな者、弱い者、無力な者には傲慢だと受けとられ、反発や憎しみが生まれてきます。そして貧しい国からテロリストが生まれ、アメリカが攻撃されるのです。アメリカはよほど気をつけて謙遜でなければなりません。これは日本人も同じです。アジアに暮らす私たちは、謙遜をしっかりと身に付けて、片ときも離さないように心がけなければなりません。

ヘロデ王は自分の王位を守るために、ベツレヘム一帯の2才以下の男の子を皆殺しにしました。日本もかつては、アジアの盟主気取りになって近隣諸国を侵略し、大勢の人を殺しました。謙遜と卑屈とは違います。卑屈になる必要はありません。しかし謙遜でなければなりません。ではどうしたら、本当の謙遜さを身に付けることができるのでしょうか。

それは1000人に3人生まれる障害児に込められた神さまの心を重く受けとめることから始まります。ケリムだけでは生きていけません。しかし健常者だけでも、世界は荒れて行きます。バニエはこう語ります。「障害者と健常者が互いに学び合って、共に生きる共生にしか、私たちの

未来はありません。ケリムたちは、私たちに“悔い改め”を求めています。私たちの間にある恐れや憎しみを捨て、競争や争いをやめ、私たちの心が変わることを求めています。私たちが心の武装解除をして、ありのままの自分になることを求めています。」

そうです。このような悔い改めをすることが、わたしたちを本当の謙遜さへと導いてくれるのです。そのために神さまはいつも一番小さな者に目をお留めになり、お用いになるのです。だから他のどの民よりも貧弱だったイスラエルを先ず神の民にお選びになりました。一番小さな家のサウルを最初の王にお選びになりました。そしてまた、クリスマスにあたっては、ベツレヘムの馬小屋に生まれた嬰兒の前に、ひれ伏すようにお求めになるのです。

今日の世界を見る時、私たちはこのようなクリスマスを持つことの大切さを痛感します。世界中の人と一緒にクリスマス礼拝を守りたいものです。周りの方々に一人でも多くご案内いたしましょう。

と同時に互いに尊敬し合い、学び合うことの大切さを覚えます。イスラームの信仰を学び、この方たちのために具体的な言葉で祈り、共に生きていきたいものです。来週の学びの会にどうぞご参加ください。